

した。私はいつも一番に賛成したものです。でも兄だけは反対しました。僕一人でも生きる。父さん帰って来たとき、皆んな死んでしまったら父さん泣くからと言うのです。

二十三年十一月六日の引揚げ命令が、やっと出ました。母と兄が荷造り、私は弟達の面倒、父は出発ギリギリに帰って来ました。遠古丹の小さな村に、たった二軒だけの日本人で最後の引揚げ船でした。

父の出張の間、兄は長男として、一生懸命にがんばりました。でも翌年二十四年十二月これからというときに、兄は十五歳で亡くなりました。一人になっても生きると言っていた兄なのに……。

※これは母が書くことなのですが、八歳の私を感じた戦争を書いてみました。

## 少年時代の終戦に思う

北海道 河合昌一

忘れもしない昭和二十年二月少年飛行兵の一次試験に学科体格検査に合格して、二次試験を受験のため東京へ入隊通知があり豊原連隊区司令部に集合、全島から八人が憲兵曹長に引率されて東京へ向かった。思えば十七歳の冬であった。当時は「よしこれでお国のために立派に戦死が出来る」と思い、父もまた姉弟ばかりで国のためにも出来なかったが、これでやっと世間に顔向けが出来ると喜んだものであった。

入隊二日目から操縦・通信・整備の三部門に別れるための精密検査の結果は無残にも胸部疾患即日帰郷という冷たい軍医命令であった。私にしてみれば胸をわずらう病などで、病院の世話になったおぼえもなく、一次試験のときも異状なくと残念でならず、駅頭で日の丸を振って大勢の人達が見送ってくれた方々に逢わず顔もないと

思いつつも捲土重来を心に誓って帰郷したがその年八月十五日戦況不利のまま終戦になりました。その数日前、樺太の五十度線を突破して南下して来たソ連軍に追われ、着の身着のまま無蓋車に乗り込んで真岡港を目ざして内地へ強制疎開の婦女子を乗せた列車が蘭泊駅へ到着して間もなく、突如南の方から砲声がとどろき、地響きも伴って間断なく続き、一旦は発車しかけた列車を当時の駅長（高瀬伊平）さんが急停車を命じ、婦女子全員を山の中に避難するよう命令した。その後の話では真岡沖からの艦砲射撃の地響きが三里北の吾が町までとどろいたことがわかった。無蓋車を飛び下りた婦女子は、われ先にと先頭者の後を追いつき叫ぶ子供ら歩けない老人を急がせ怒声を浴びせながら、これが人間かと思うような悲惨な光景であった。急がせながら歩いて二里ほどのあたりから老人が一人また二人と道端の草むらに腰を下ろしたまま呆然としている。聞いてみると、「これ以上はとて無理なので置いて行ってもらった。家族の者は先に進んでいる。どうせ死ぬならここでこのまま逝った方がいい」と言う。戦争の被害者は子供と老人が真っ先に受

けるようだ。我々もジツとしておれず三里ほど山へはいった林務署の苗圃へ避難した。「ここは大丈夫だいいよソ連兵がここまで来たらこの辺の山道は全部知っているからいつでも逃げられる安心なさい」と言う言葉に甘えて滞在させてもらうことにした。二日くらいにこそともなく過ぎしたが三日目の夕方、ソ連兵と一戦交えるので十五歳以上の男子は全員集合するようにと通達があった。私と弟が該当するが母は「もう戦争が終わったのだから、こんなものは関係ない」と言うが、通達があった以上は行かないと卑怯者と思われるのは心外だから絶対行くと頑張り、母は泣く泣く片方に薬と布切れ片方の袋には小さな握り飯が二個はいったのを両方の肩に下げて、暗くなるのを待って下山した。町役場の前に行ってみたが猫の子一匹おらず南の空だけが赤々と燃えているのが見えるだけ、真岡の港に貯蔵してあった石炭に火が付いて燃えているのだと聞いたのは後日のことであつた。矢張りデマだったのかと二人で再び山に戻ったのは次の日の明るくなる頃であつた。

昭和二十二年六月一日無事函館上陸、引揚後の生活の

